

らじかる



創刊号

“アイデア出版”設立の意味

われわれは人に従うのではなく、^{アイデア}理念に従うのだ。——エンリコ・マラテスター——

本の出版は近代社会において、人間精神の自由を明示するものであった。同時に多くの著作家は自著の扉に献辞をかかけ、精神的物質的庇護者をあきらかにしたものである。むしろまた一著述によって、庇護者を求めるとか、社会にデビューする手段にした節もある。

しかし、これまでの人間の変革、社会変革が、本またはパンフレットによって起こされたのは、歴史的事実である。例えばフランス革命を準備したのは、エンサイクロペディアの人びと、ルソーの著書であり、近くはロシア革命の精神的基盤、革命の伝統を形づくったものに、十九世紀ロシア文学に携った人びとの諸著がある。また五・四運動の文革は、現代中国の革命を達成する推進力になった。

本の形式は、現代のように表現・伝達手段の多様化の中でも理念を取扱うのに適した最後の場だと思う。それは情念と論理^{パトス}を文字に化し、時間と空間を離れた読み手の理解と共感に訴える。〈一冊の本が訴えるのは、せいぜい四千人ぐらいの人だ〉とブルードンは言ったが、彼の理念も今となっては、その著書に拠るしか判らないのだ。

私達はアナキズムの理念に従う。しかしそれは不動の権威としてあるのではなく、理念を探求し、自己に引受け、支えるものとして従がおうと思うのである。ところで今日では経済上の専有は批難され排撃されるのだが、学問の上での専有はどうだろうか。

※嘗っては、欧米の思想状況に通達していることが、それだけで権威となる風習があった。そして実にこの事からして、私達を無数の思想が通りすぎ、私達の精神の営みの中で激烈な葛藤を引き起こしたのである。

それ故、私達はアナキズム思想の本を専有するのではなく各自の自己形成、運動の始点においての問いかけに資するものとしよう。

これを比喻で語れば、フランスはザルツベルグに岩山があり、その山腹の洞窟に小枝をもちこみ、置いておき、数日を経てとりだすと、小枝に純白の塩の結晶体が付着する。私達の精神活動が実にそれである。一切の生の醜悪なものがそのまま変容して一さなきは蝶になる—新生が始まるのだ。

“アイデア”出版の本は読者各位が、それを活用して理念の形成に参加されるよう希望します。

異芳の自我境

——Not the fruit of experience,
but experience itself is the end.
WALTER PATER——

櫻井 博

アナキズムの思想が確立したのは近代の所産である。絶対至上の強力な体制の社会が存在し、絶対化された権威に対して、人間の幸福をあらゆる人々の幸福とするために、自発的に闘い、実現させることを望み叛逆をくだでるとき、思想的に確立し、認めさせる必要が厳然としてあった。この活動は個人の人間性の主体的存在の構造を確立させることとあわせて現在も引き続き取りくみ発展させ

なくてはならないことである。

「己れの生涯をいかに生きぬくか」このことを思想的に扱うことの少ない国においては、人の幸福そのものを創りだすことよりも、幸福の要素となるもの——いうなれば工業の進歩——にのみとられる傾向が強く、多くの人は走り書き的な生涯しか見いださないで昇天してしまい、はかなくも封建体質の悪弊から自分の身をさけることしかできず刹那的虚無の瞬間に現実的価値を求めたにすぎなかった。そして灰色の単調な単音で人々は言葉を交わし、ただひたすら平穏で絶望的日常性の生活から脱することができなかったのである。そのような生活というものは杳冥なる蒼海^{ようめい}にながく影を残してゆく孤帆の航路が淋しく消えていくのを見るようなおもいである。

現代の社会がいかに工業や科学の発達が高度なものになったとしても、ただ外見上の華やかさだけでは、その文明の本質はグロテスクであり、観念と心像は貧困からのがれられないものである。思想の根源的体質の欠陥は指摘するだけでは克服できるものではない。新思想は生活に結びついた精神活動と、独自の純粹知覚から派生するものである。

我々が授かった生命というものは美しいものである。その美しさというものは刹那刹那に完全に燃焼されなくては無意味のものとなってしまう。ウォルター・ペーターは彼の著書『文芸復興』の結論のところで「経験の果実ではなく、経験それ自身が目的である」と言っているように、各自の苦渋の経験の中に甘美な夢が発生し、生活を豊麗させる瞬間こそ至上のものであり、その瞬間を敏感に感じるとき誰れしも精神的に解放された快感をあじわうことであろう。このような歓喜を伴う経験の状態に依存する生活こそ数多くのユートピアンがさがしとめた境地である。

印刷・出版

バルカン社

TEL 03-354-1039

各自の生命の美の解放を獲得するために、「美」の理想的新世界を伴う純白な生涯を形成する理を己れ自らの努力によって開花させなくてはならない。その過程においては理想的新世界を思考する苦に喘ぐ姿に、微笑をなげかけてくれるマドンナは残念ながら存在しないのが現実である。我々は自己の存在の主體的構造を確立するときまで、微笑などもらしてはいけなし、断じて心やさしきマドンナをさがし求めることなどすべきでないのだ。我、ひとり異芳の境を開拓する。

私以外の何ものにも忠誠の心情を求めない追求心によって自分の生涯に異芳の個性を散させることから、自分とは異質の異芳を發つ叛逆児とソリダリティー（連帯性）の世界苦のなかからネオ・アナキズムを発生させることを希求する。卓抜なる思想は強い真理への追求心を凄まじいまでに直視し、如何に探求するかという意欲をもってしてはじめて確立するものである。

私は荒地を耕す堅忍不拔の精神をもった自由の民としての叛逆者となりきることを欲す。そしてこの精神の小宇宙には、妖しい異芳と光明とが幻出する。そのとき私の生涯というものは白金色に輝く不滅性を帯びたものとなることを確信する。

アナキストの人格は行動にうつるものである。強烈な自我を獲得したアナキストが全生涯をかけて壮絶な闘いをくりひろげるとき、アナキストの個人的魅力というものが無限大の不定となるのである。

自分の生活^{こころ}を秩序づけるものは、あくまで自分の魂でなくてはならない。絶対おしつけられた秩序のもとで生活することは拒絶すべきだ。

アナキストがいったん筆を手にし、文を書くとき、それは単なる文字の羅列であっては決してならない。表現しなければならないことは、アナキズム思想を深く理解し、愛情の念から発するところの独立した立場から個人の完成を展開させるためのものでなくてはならない。であるからそこにはアナキスト独特の特色が表現され、現世に唯一無二なる異芳を放つのである。

いまこそ自立したアナキスト個々人の世界観と人間観のもとで相互扶助の社会を結晶させるべきだ。 Develop one's ego /

1973. 4. 14

現状の認識

はしもと・よしはる

1968年12月自由連合紙は報告した。〈われわれは敵前において、迂回作戦をとる〉のだと……。以来、ここに拠った人びとはひとまず連合を解体して、それぞれの思惑と生活拠点に散開した。その間、あれ程高揚していた学生運動は下火となり、そこへ参加した人びとには、それが最早、記憶でしかなくなってしまった。

時の流れは素早い。以前ツルゲネフは思潮の方向の定めなさを“けむり”に例えたことがある。今わたし達の周囲ではなにが起きているのだろうか。激動の時代から高福祉の時代へ、ほとんど一年目ごとに考えだされ叫ばれるスローガンにかかわらず、ポストヴェトナム、基地反対闘争、公害裁判、自然破壊、環境汚染にもかかわらず、私達の活動は依然として低迷している。その暗さは薄明のようで、容易に突き崩せるのだが、手答えといえは、無視と無関心と行為の意味喪失としてはねえってくる。

ある者はアナキズムで何もしないより、世間に認めさせる何かをする方がよいとして、矯激に走り、近く刑の宣告を待つ身になっている。またある者は、アナキズムではまずいと言う。なぜまずいのかはよく判らない。兎角まずいのだ。

アナキズムの多様性からして、その理想は一致せず、従ってヴィジョンがもてない。だから何がアナキズムか判らない。どのアナキズムでやるのか知らせて貰いたいものだ。私は“社会に機能するアナキズム”だと答えよう。

別人が言った。現代での民衆は被害者であると同時に加害者だ。民衆のすることすべて

〈4ページへつづく〉

イデア出版案内

アナキズム文献の中には初版がでた際に、それを翻訳移植するにも、わが国情によって不可能なものがあつた。今度の“女性解放の悲劇”がそれだ。伊藤野枝が〈婦人解放の悲劇〉〈小数と多数〉〈結婚と恋愛〉を出版したのは大正3年、同じ頃と推定するが、辻潤は〈フランシスコフェラと近代学校〉を訳出している。イデア出版では大巾にエマ・ゴールドマンのエッセイを取りあげ、その他の原典からも適宜編集・翻訳した。彼女の生涯と思想はこの一書で充分うかがうことができる。

女性解放の悲劇

▶わが生涯を生きる◀より

カーネギー製鋼所のスト
ホームステッドの惨劇
金を作るのに街の女となる
サーシャ(A・ベルクマン)フリックを襲撃
売春宿に落着く
モストを鞭打つ—他—

▶エッセイ◀

アナキズム
小数者と多数者
女性解放の悲劇
結婚と愛
フランシスコフェラと近代学校
女性参政権
愛国心

▶評言◀

ルイズミッシェルの印象
P・クロボトキンの印象
クロンシュタットの印象—他—

▶ロシアに於けるわたしの幻滅◀より

裏切られた革命

▶年譜◀

(出版は6月です。只今ご予約下さった方には価格がきまり次第連絡の上、2割引きでご奉仕申し上げます)

が正しいのではない。民衆についての盲信。
〈民衆の中へ〉のような発言と行動は効果を失なった。事例として、“関東大震災で朝鮮人を虐殺したのは日本の民衆である。この場合彼は加害者だ。その民衆が一銭五厘の令状で海外へ行き、彼の地の民衆と戦い殺された。この場合、彼は被害者である。”しかしこのソフィズムには次のように答えよう。

ここでの民衆は知識による判断と価値による判断が混同されている。もし水がある場合にからく、ある場合に甘いからと言って、人はその水をすべて棄てるだろうか。何故水がその場合そうなのかを探求しないで、その水は悪いときめつけられるだろうか。価値判断によれば、カライ水はカライなりに、甘い水は甘いなりに有益である。同じように私達が民衆にかかわるのは、民衆のよしあし、可否について論議するのは、自由だとして、判断は私がするのである。私が民衆の側にいるかどうかを選びとるのだ。“すると貴方にとっての民衆は観念であって、具体的な人間ではなくなる”何故なら、人は具体的な個人である隣人に対して不親切であっても、人類に奉仕すると言えるからだ。

私はかような論議のできる人は不幸だと考える。彼は隣人によって裏切られたことはあっても、感動を覚えた経験がないのだろう。

それは丁度、詩や小説に魂を振蕩された経験がないため、詩や小説は判りにくいようなものである。芸術に縁がないのは致し方がないとして、民衆に縁がないのはどうしたものだろう。にもかかわらず彼が民衆の一人として生きているのはどう説明できるのだろうか。私によればそれこそ彼が自己の観念の世界に生きているからだとするのである。或はまたそれほど私達が既成の観念、規範によって生き、自由ではないからなのだ。

当面のプログラム

アナーキズムは、それさえ持てば一切が可能主義主張ではない。つまり明日にでも変革が起きる態のものではないということである。アナーキズムは個人の生き方と社会における行動を各自に問いかけ、求めるのである。各自はアナーキズムに答えなければならない。

即ち、私が私であり、私が社会において、しかも私であり得るには何をしなければならぬか。“私が私である”というもう一人の私、無数の私とどのように関わり、どう行動するのか。これをくらしかるにすすめるのが私達の当面の課題である。

現状において人びとは無秩序に行動している。というのは人が個人の欲望、エゴの無定見な拡大を指標にして生きる限り、その表われとしての社会は無秩序にならざるを得ない。人が生まれながらに疎外された世界に生きているとは、その意味である。こうした生き方の中で、ある人びとにとって都合よく、個人で集団で自己の欲望を効果的に達成しようとする動きがでた。この人びとは知識を専有し“知識は力だ”として、モノに変える工夫をした。また仕事を細分化して、より効率を重視し、それに適応しない、また出来ない人びとを除外するとか、恩恵的に施す体制を敷いた。以前には各自の生き方と生産とは不分離だったものが、人間から独立して生産が可能になった。むしろ生産は人間の欲望を先取りして、それを製品化し、人格を所有するに至ったのである。こうして利潤の追求が正当化され、それを経済原則にするなら、公害と環境破壊は実にその世界の一部に属する。それは民衆に対して自然災害と同じく運命的でさえあろう。しかし私達はそれが偽—自然であってそれを成立させている理念はくらしかるに变革できるし、またしなければならないとする。

私達の小誌〈くらしかる〉は自己のらしかるな変革および他とらしかるにかかわるのが念願である。だが現状は！

深夜が未だに自然を閉じこめている。

—ヴォルテール—

くらしかる 創刊号

発行日・1973年5月1日
編集人・西塔昌弘
発行人・はしもとよしはる
発行所・イデア出版
東京都新宿区東大久保1-464松喜ビル
TEL 03-354-1039
定価 35円